令和５年度教育懇談会 参加者の皆様からの御意見

今年度開催した教育懇談会において、以下のとおり、参加者から様々な意見をいただきました。

県教育委員会としてはいただいた意見を参考にしながら、誰一人取り残されることなく全ての子どもたちの可能性を引き出す教育の実現に向け、教育環境の整備、ＩＣＴを活用しながら教師主体の一斉授業から子ども中心の場面を増やした授業スタイルへの転換、教科横断的な課題に探求する活動などをさらに深化させていきます。

～令和５年度教育懇談会概要～

□日　時 令和５年１２月２０日（木）１８：００～２０：００

□場　所 防災新館４０３・４０４会議室

□出席者 ２３名

県教育委員 ５名　県教育長 １名　県教育委員会職員 ４名　一般公募による参加者　１３名

□テーマ　『山梨県が今後目指す教育の理想の姿、取り組みについて』

①子供が主体となる学校

②社会とつながる教育

③山梨県が今後目指す教育の理想の姿

①子供が主体となる学校
・生徒も保護者も一人一人の個性がある中で、現場の空気を変えて、多様性を認め合えることができる環境を作っていくことが、子供主体の教育ができる現場を作ることになってくると思う。
・友達などと話し合う機会がある授業のほうが楽しい。そのような授業は自分で考える時間があるので物事に対する理解が深まると思う。
・受動的な授業から転換する一方で、受験などに向けて高めなければならない知識や能力はどうなっていくのかは気になる。
・一斉授業から個別最適な学びへとシフトする中で、これからはいくつかの教科が一緒になり、複数の知識などが盛り込まれるため、教科としての概念的なものが覆される部分があるかもしれないと感じた。
・大学の共通テストについては、最終的に正解主義が取り入れられており、多様性とは矛盾していると思う。
・大人目線の教育の話で、子供がどこにもいない。社会で勝つための子供をただ作っているような考え方にしか思えない。子供主体とは何かの擦り合わせが必要ではないか。
・勉強に追われていて、ＡＯ入試の面接や小論文で求められる能力を育むために費やす時間がないのではないかと感じる。
・（教育振興基本計画について）学校で学ぶのは子供なので、あなどらずに子供の意見をぜひ聞いていただけたらと思う。
・学校における部活動の指導など専門的なことはどんどん外部に委託すべき。先生の業務が多すぎて子供の姿が見えていない。
・(配付資料に掲載されていた)1970年代のずっと黒板に向かっている授業風景には驚いた。また、自分にはキツいと感じた。
・子供と大人の関係性をフラットにしたほうがいい。子供と大人ということではなく１人の人対人として対話をしていくべきである。

②社会とつながる教育
・地域との連携において、学校側の都合もあるかと思うが、提案したとしても実現がスムーズにいかない印象を受ける。
・コミュニティスクールや、地域人材の活用については学校・地域性による差があると感じる。昔から地域と関わっている実績がある学校は、そのまま継続的に活用されている印象がある。
・大きな学校ほどうまく地域と連携を図れば、地域から大きな力を借りることができるため、普段から地域とのつながりを増やしていければいいと思う。
・保護者からすると、子供が卒業するとその学校とのつながりがなくなり、関わりにくいという印象を持つ部分があるのではないか。
・防犯・防災の面で、地域の人たちは何かあったときに一緒に避難する人たちだと思うと、いざというときに地域とのつながりは必要だと思う。
・個人の人脈などによる学校と地域とのつながりを引き継いでいくためにも、現場と地域が近づけるような場所があればいいと思う。ただ、校長などの管理職次第で変わってしまうようにも感じる。学校運営協議会のメンバーは変わらないので、続いていければいいが、そこまで運営が回っていないのが現実だと感じる。
・グローバル化という視点で考えると、英語の授業のコマが少ない。決められたコマではなく、英語で数学の授業をするなど、異なる観点で授業を行うことで、日本に縛られない考え方が増えてくるのではないか。
・配布された資料は考え方を強制されているような印象があり、とても違和感がある。
・こども基本法が制定され、子供たちのことは子供たちが決めていくという権利がある。子供たちと接する大人たち、特に先生には子供の権利というものをもっと知ってほしい。
・地域の大人は学校での子供を知らないので、フラットに子供を見てくれるということが、地域のつながりで大事なところだと思う。
・地域と連携した活動について、子供がやりたい、知りたいと思った内容だったのかが疑問である。子供発信でやらないと意味が無いと思う。
・一人一人にきめ細かな教育をと言っているのに、こういう子供に育って欲しいとか画一的なリーダー像しかなく、その他の属性をなぜ表現しないのか不思議に思う。
・コミュニティ・スクール構想は素晴らしいと思う。学校が閉鎖的なので、それが開かれて色々な人が入ってくることが理想的であるし、その中でしか学べないこともある。そこに子供たちが心地よくいられるかということも大事である。
・親が学校に任せすぎていてどんどん学校への意識が厳しくなっている。依存し、依存させている関係ができてしまっていると感じる。

③山梨県が今後目指す教育の理想の姿
・昔は、教員といえば素敵、立派だと言われたが、今は大変ですね、という印象になっている。子供たちは敏感だから教員の印象が変わったことを強く感じている。
・子供の一生に影響を与える関わりをするのが先生ということを考えると、子供のパフォーマンスを引き出してあげられるような想像力を持ちながらコミュニケーションをとっていただきたい。そのための子供と向き合う時間確保の一助になるのであれば、働き方改革もぜひ進めてほしい、という思いである。
・教員の数を増やすには、教員という仕事に興味が無い人にも興味を持ってもらう取り組みをしなければ、人は集まらないのではないかと思う。
・部活を指導する先生について、学ぶ意欲を出させるための指導をするのが先生だが、正当な対価が出ていないため先生のモチベーションが上がらない。モチベーションが上がっていない先生に指導されても子供たちのモチベーションが上がるわけがない。ブラックと言われない対価が必要である。
・学校の先生になりたいと憧れられるような、また多様な視点を持った先生を育てていくことが子供を育てていくことにつながると感じる。
・年々不登校が増えているということは、大人が考える「良いと思う」という理想の姿を作れば作るほど、子供には合わないのかもしれない。
・教育長や教育委員の皆さんが積極的に学校現場に出向いて、一人一人の子供の声を聞いて欲しい。
・学校自治というのは先生たちが決めた校則などの中での自治であり、自分たちで校則を決めるなどの形でなければ、本当の自治ではないと思う。
・自分が自分を肯定できることがスタートのはずなのに、相手がどう評価したかや、誰かが「良い」と言ってくれた、ということで人が作られていく教育現場になっている。自分のことを好きだと思える子供を育てて欲しい。
・社会で役に立つ子供にならないと良い子供じゃないという風に、かなり前からなり始めている。「人材育成」という表現を用いていることも危ないと感じる。
・子供はすぐに育ってしまうので、スピード感をもって教育環境を変えて欲しい。
・やりたい子はいいが、やらせるだけでは心が育たない。やりたいという気持ちを育てるような教育をして欲しい。